花園奇談　夢見艸

へ13
469
3

へ13
469
3

内へ遠13
號469
巻3

花園奇譚夢見艸三

福東子玉雄編

長嶋町五丁目
大野屋總八

第六回

[illegible]

紙幾よりおのく里より落根長紀といへる
浪人ありけりそは代々木家よりつかへて
食祿あまたさきもひろしかるに
りとく不義のるゆあるゆをもて主をあざむき
世ゆをよりて使わしつ長紀より二人の男

子あり浪之丞と同年にて和を長吉と
よびり浪之丞はあさましきようの友まく
つまり親〳〵幼のひまをぬすみこゝろざしよう
らぬうやの主つきこれば浪之丞はうらぐよ
親〳〵交りとゝもんのうちよりふのく
いとこひ孝行なり父母はこゝの事を老
ふさるのゝうらぬをなげきさまぐ
よいんとらくるがこゝいんごるまより三き

てうれは家とあるべく侍所を一見せり神社
仏閣とおれせんとそこく出られべを言へ大
ふようこびあ家まるよのこふるまひろる
まくあくうのくもあくまよのくらひ
なくうこのころ浪之丞山はてかん
ぎーとゆうりといくるとをひろよてきく
いぎーこんこうくきりてるのかんぎーとまよ
いまおのまこうの女まめぐりあひ幸〳〵と考ぎや

とんのうちよりこゝにおりもうすとうかゞひ
ありあるかを吉八ゑんのをとうと申あり
ていさうよりの手のこゝろ足十さいばかり二ッ三ッ
まゝてこゝゆる女のあくさづくをひろ巳
とうて例の通りとあるてゝの不をいづきて
こゝろとひろうあざむきこゝろんとこゝひりの
ゝげよりかれわくれをこゝろ彼方の内
まハ浪こゝゞひこゝろしーかんざーありこれハ
三ノ二

この女をゆりきこゝろうーろの方ようよび
ゝけゝく 長 モこゝくあるくこゝは通筋て家の彼
紙包をおひろひるくれハるこゝろうませんゝ
乳 おまへさんのお落しをこれまゝこゝのでざ
ヤまするこゝゆるゝおこゝーヤまきゆうと
彼包をこゝろせばを吉おいこゝこゝれハく 職ま
ありがこゝゞざゝうまする 乳 おつをこゝとをおぢ
ヤまするゞをゆよゞざうまするかんざーこゝ

のかのおんなのこのうぶぎやはおぼへおすんりょう
ゐされさとさおぼてゐられさるべでござうま
すがぎういさてそれとあるくへおぼゐあさ
ぜやすとさうくよりもを言へんのはようとび
て 長 イヤはるよりまてんぞ傳よおそづうし
うござうますまうはうんざーのやしお
まんさんのはをんとうみうまうまえべせあて
んのさけとおをゐーやて角のをひとをゐ

まあうそんまてはゐ銀をへやあるまーしさ
おんそめやーさおぼるごらうのおうさやらて
も弟へはさアあうこそも男とをれさうられ
あのやうゐ可まらへはおうををまよおうさとさ
ゐりとそふてうんさのとをひまてううゐをれて
ゐさはよおうてゐうゐこの金銀ををおか
とんでやりてうふが日やでも銀ようそごををゐ
さず拾へうごもりふをうぞずおとをへ義末の世

みてちうひとう素よつうまて〜ゑぢでごりま
と潤ごつおまを碑〜ちうよりめうこまを
さ申〜ゑうこのとさおうえをやうこんおうさんで
ごごりまうこうこでおあようりまとい云れで
絲のあるのでごりまを申おあうさんがさんい
ゑてごりまれべうちあけくおをりや
ま申うこうこ〜うこ人とまいた大はの系の
商人まて答福ちつとりの手張子とれが

おぎやてここ〜十ちよおりあそがされ新仏
さまこうちやごゑ位のやうこゑをおむをされ
まがえをこの写帳へおまあうゑされお遍へお
えりあそがされまとの申ちうちが
うちとおつ申りされうおとをおつをされ
このこうとゑりまてたくゑりさゑがりう
まをず品ぶうくとおつづひをされまを中
り色福とうや申うゑおづひうとえど

きていろく おさてゝ ゝまずと ゆうく おさ
ゆされまゝと三回月のおもむきを ゆく
ゆきよりのぐこれべ ゆきを ゆく
よろこびて 図 これへおりひもよろぬおこと ゆ
おえをあゝせゝその日よりこのおぐこの
ゆよつゝてゝ ゆされへいこさもとえるか
げもちへゝれくゝぐこへいるのこゝまへのゝを
まぜずたこへ縁ぐござりまゝてゝゝこゝび
三月

おうようゝとてかゝるおをゝこな
ゝ方の程ゝゝゝけゝものとおこげをゝ
もあゝふゝと云ひまゝへせべまゝす程ゝかゝ
ゝこの方と我ゝぐゝうのが身を恨てゝりま
ゝゝ 乳 イヤモウゝゝこゝのはゝかゝゝゝ
を中出ゝ大切ゝお娘さんをゝわゝゝのゝ
いゝゝまゝすゝでござりまゝすぐ出まゝゝゝち
ゝておゝまゝとお余もあゝふひものごぎ

まさまさて命うあるべきそのしるべこそ
ますます死ぬ程こがるべておいでゐさるおまへさん
よおあませやり はるひがは旦那さんはまんぞさんへ
まをきしても可愛くおもはれおぼえさんのあるもん
でもいろうその男よりそへはせるゆへゐるぬ
とへよりやおつしやりゐされまをまい男
とやかくとむづかしくまんやうゐ着え
あゐおさん一番よつまをて私がなをまへおかくま
三六

いやまんぞ何よいまをせ今う青のうち是尾よく
あへまをこやまをまうこのあうぜずやくそく遠ぬやう
おまちやておりまをうと家内のやうす忍び
いるこちのつひぐくをよくまへ合巻を言あて
あへいたとまをへいうまをれりこそよ作こそへゐる
へ作ーそこまを彼彼約づくをうしゐひれべゐま
勢ゐこそこのしことこがつやあつこのこそ
へ来うり出者うかの包をれ来るをこそ 限男

去さんそれいはてしがおとてしさのでござりま
どでどりてしまおんみんせんとうしろの舟
よりこんうけらをこのうりせしがを去いさ
あるぬ作よりてあして 去 ハハアはそれおまえのお
とりあをろうこのうこもそふおりつこうう
今どこのうをつうこのうくやくこころをと
こりがんが付をうくのことをもうつくおこや
しこどいぶんおあくまうんしやを去うが
三七

いなくされ行ん 限 そうやアを去さん日ごろまも
ひをいあるされれんくとひをんりんざ行ぬんが
あんぞのをうま 去 それざうあうたまうく
ひをのさきうぬんあうこうふさあくまうくし
へきれんあのうをでも行くこのゆまあるんざ
しをひうちまおんあせん 限 それいおあくんの
ひあるこどうこをまいりのどやアぬが
そのうんざーいをりあんい 去 それでもあの

へさてゐすつことをんだらじやねんうつ
ちがりうつくをいつこうゐるゐるのりう
つくおうざあどこのゐちがりつくいつこうを
ちゝよゐうざうこん 院 それへこうざそれど
もをぞうりい一せのおゝゐうざうこん
ぞりんして 出 こうちがうりひゐてゐる
が舎利こゐんさしがるうるゐつてもりう
い行へじやあちりゐせんとこゝこんぢうよ
三八

ゐる浪こうゐるゐおんびんまかんざをとり
うどさんとこゝをつくせどこゝこまず
出 三 めんどゐざひうくゐすいうゐるゐうこめ
ううひゐゐいへ吉行へこんゐるゐをいつのう
いやざうこゐゐうるものをいへがゐんの
うのと情のこゝひるゐをいやあうるとひて
浪こうをつこゝたをすうえ来 せ吉へかんざ
へりこやいうじとおりへども浪こうくて

かくてあるべつひよりぞやまとるべー
とおりひかんぎしよことよをあへよくべ
うちころうさんとうろうまんかりきうとえ
きうぎれべつきたをきれくもまむうひせ
ずもきがりもそそよそうり 浪もさんあ
へむりぞつうりそんあことをいへなくてな
さちのようさぐどうぞうんしておうんな
せんといふをそそまもうさうまずまさつ
三九

きたをせべあとのけよぞうさうをる
よくめでおうさおうもたてげうきそ
らとちうさうよやうせそけうさうん浪之
命ハたまうるぞうウといふまいきたん
うあうまひべし孝子時をなぞーく
亜人のうあようひそいとうぞうをむう
く死出の旅路よあもむくことをたまうと
をなげうぞうんなたまうこをかなーまぎ

ざゝん 毛 ホイ 可 あい 整さゝうをゝとをゝゝあん
まゝうをゝひきよ 者よう ごいさゝんゝゝゝゝ
たいゝんぐゝとゝもものつゝぐよゝぐゝうゝゝゝど
んふゝうゝとゝきゝくゝ 者ゝゝう 結ゝゝゝゝ へぐゝもむゝと
まいみゝとゝぐゝうゝゝゝく死ぐいゝとなげいまゝんとな
ゝゝるゝまゝゝゝのゝゝゝゝ 来 る人ゝゝゝうゝゝけ
らまゝゝゝゝ一ゝゝゝゝゝと死ぐいゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぐゝゝゝもゝゝくゝゝゝゝゝげゝうせゝゝゝゝゝとゝゝゝゝ
三十

来る人へ物人なりや次をゝゝて書ゝゝゝ

第七回

かゝゝてゝゝのゝゝく来る人ゝゝあゝづまのゝゝゝの孫 ぶん 人
まゝて大 あつ はのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝびのゝゝりゝて来 あ るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝく来ゝゝりゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かねをそなへまゐらせひとんたちをでまうをと
ころようらをとりいだし　陪従のあ
とをぬぎひきひろこしてまうをとこ
あるこまぐまかいらうあるりをべかう
くすをいまを出うりうの後人（まうとうど）入るまろ
こびをとをもらをうをあるこうく　後人もを寄
をたるまおりらまをせんく　浪こまをいくどをこと
さをゆいは去んせうまいかいるうらどをれく
三ノ十二

ありがうらうそんじやすす　後ぞうあるろ
うのざん　浪なごりとあるそひをいこ
うをこそをうをつよくいるうをまこと
ますとそれうのちのをいをうつかが
へがどざうりまをせぬ　後それでいをこをそ
うちがいをこまを去をうるうらんどをれ
ゆおうつくいうくあげくひがうをこ後人の
こをでこのあをんのをうすれを去ずををこま

つくとのご 浪イエ ごうりいさまそいつさく
しのところへ花ぞのとやまそこかへ
毎日いつさう来さういさまます内へひとり
でまの上ゃすず様よあついおそさけでき
ぶん 分もさうなりまさまさ 続 そんあうあり
さんへ花ぞのとさとでござりますゥ 浪 さ
ゥうでござります 浪 それでへおいうな
いでもかけますゥ 浪 ゥうまます とゥ
ミ十九

きうしあなさまこのゥうまれおんまなり
ますて様よおれいのいさまゥもござり
ますんりそやりもんれますしむさる
しうへござりますすぐうさまのところ
へおとまりあされうくござりませ 続イヤ
なまれおんごのおれへごのとうそまそへかん
つういさそうりまたとひめのへよけく
ゥ続しつよへゥうさあうさ

けをかけるのが寒氣(かんき)べい拵(こしら)へでござり申
ゝまをそこらこらこら

ゆゑるうこそよろうこ
こくこくたづの出てごうごうてきて
られよとのぼるものこさきかどあめん
さんのおうれをこれば かまくらの最
まうりをうこうよろこぶとそのまてよく
みこおうこもあれば ふるりのりや弱
るぶうこうとぞんぜ一カんこうもとな
くかいわういうこうけたまはれば 三十四

宮の宮とおつきゆりまきすがりやあふ
このおぬまんへ浪こうこうなとふもこ
ませぬうとこうくよろ浪こうこうれこ
さよ浪いうよもこうこうがこの浪こうでで
ざりまきす弱さゆうでごうまこうこう
きこ ぬこことてたこさよれこ乳やまこさ
浪ゆるわどこくのめのぎこうよ交ぢいんん
をおつれるこされこうこうぐ二ゥとぞこうこ

実ぎ人はいらぐ[illegible]さ[illegible]とのる今と
ゐんのおとづまもあらざるゆへこの世よ
生涯でおそすゆうおそぬことあろう
あけんまよろこうよかつてありまさそ
れたうあづまへおんぐりなされいやで
ハこうおうよあつて弟されますう 旅
イヤこうあうのたんのでんございません
きこんもたぜいつうひかまんう一とらく
三十八

二ちへさぐうぬ旅人でございますあち
らんは出たされてはらんなさい宿ケ器
のハまんうう答七々の名所四化粧ざう
うう鶴ぐんぐ彩よう系よ源川の彩地仲
町ぜうしさ泥谷赤坂根陣谷中ホイ見
でいたその名所ぐをひりまさのこうず
つうぐはあんないやますす 浪 それへざぐ
おりろうう[illegible]やくあつうさんはいたく

せやうこいがおろかもさぐよおいでなせん

【孫】イヤ　そうこうもいうてこうこ

いまうすが大はの孫よも大旦那の仏金剛

ぶ仏出なさるとりつますすゆんこうを

をもおうづまやさなられべなりませ

ぬ【復】それいまかぶうことでもある

まいう【孫】イエ　ふんぐの内でなられべチト部

合がうるうんぐうます【復】大はようさし

の仏文があるといふてもサウパリうても出

らないおうさんもいまでおなり

かなうつくそれいらとぐいないう孫さん

いうくうをだやってさんやり紫

屋町へでもとやりなさらうといの陰

文ぐうう【孫】いくどういうまてなん

のうをとりやう　まあ出ゆうあなさもかを

ぐうのよいおよあひなさうなんおにぐ

うるさうござらいまするもとおぼしめし
ぐどざらいやすたうまぐややうちんぬと
もやうしまあとたぐひようれし
きをうらなれば浪こうもさたか
どのうさをとまれむぐらうまこと
まぜうんしてうを出かける 浪イヤさり
きんとんぐやうよあひやしこと 籠まことと
まあやうひるもてぐらいまうしさうまうこと
三十七

おめんさんへおとこがいうこうの鶏のいしを
うたうふうでぐざうりやうこと 浪とさまお
めんの名をなんとらひなさうさうこう
きこうとおりつくわさがむさうだを
たしでつひこさうなうこと 籠ハイまこと
ぐ名ハ鶏ノ親八とりつしますとこと
して来ようちは天はの鶏よりうれば
浪こぐ稼ぐとこうへあすよこをせへ

[illegible]こんやでゐられべつごゝろがゐるさま
[illegible]ごゝいきすあるさのところへ
八二三日のうちは二三人宴会[illegible]
うひがまわりますすつりでゐます
すいづきもゆるあるさのさま
ろくまいりまきをおをりつさま
いぐるつしりけがごゝろすせん 浪なん
のおろ[illegible]へ毎日[illegible]
三十八

[illegible]つうひへごゝろすせん 鯉さ
よう[illegible]おろれりつまき
よう[illegible]と浪[illegible]
[illegible]ぶ伽文のありといひしぐるの名を
ずよびのどして[illegible]ねんとうろくく
よびかくれどもさぐるさまずなりよ
りは付日へくれをして成の初ごゝろな

るべしとて彼(かの)書(しょ)は浪(なみ)のうへ人(ひと)にあらず
きびつれべきにんにあらずとこひ求(もと)
めて書(しょ)くをたゝしたゞいそ
ぎてもとめのもとをなる
すやうに次の書をよろこびたまへ